

特集

# 「モバイル時代のサービス」 特集号について

丸山 不二夫<sup>†1</sup> 浦本 直彦<sup>†2</sup><sup>†1</sup>早稲田大学 <sup>†2</sup>日本アイ・ビー・エム (株)

いまや「万人のもの」となった携帯の普及をベースに、携帯からスマートフォン・モバイルデバイスへの移行が、全世界で10億人規模で急速に進行しようとしている。現在4割弱にとどまっているインターネットの利用は、10年以内には、世界人口のほとんどすべてをカバーするようになるだろう。それは、20世紀の後半から始まり現代の社会と経済に大きな影響を与えてきたIT化の1つの段階が終わり、次の段階が始まるという世界的な変化とっていいものである。

モバイルだけではない。クラウドサービスのクライアントとしてのモバイルデバイスの普及は、同時に、クラウド利用の一層の拡大をもたらす。モバイルデバイスとクラウドのサービスが、ITの風景を大きく変えようとしている。モバイル時代のサービスは、現代のITのグローバルな競争の中心舞台であり、そこで生起し提起される諸問題のアスペクトは、ITの未来を占う最良・最重要な素材である。

本特集では、モバイル・デバイスの製造（ソニーモバイルコミュニケーションズ、シャープ）、モバイル・サービスの展開（KDDI, Twitter）、モバイル・サービス提供のインフラの構築（富士通、グリー）という、3つの視角から、それぞれ2編の論考を集めた。かつて、日本は「携帯先進国」として、携帯の分野では、世界の先端を走ってきた。モバイルとサービスの時代でも、日本から、新しいモバイルデバイスとサービスが登場することに期待したい。

最初の2編は、スマートフォン開発の現場からのプラクティスである。

「スマートフォンを再定義—コンセプトづくりからみた商品開発—」は、ソニーモバイルコミュニケーションズのXperia開発のプラクティス。デザイナーが、技術的なハードルをエンジニアの目の前に出し、エンジニアが部品メーカーとも共同で技術を開発し、デザイナーの想いや、それを実現した技術陣の努力を伝えようとマーケット部隊が動く。それらを結びつける要が、消費者を念頭

に置いた商品の「コンセプト」である。現代のデジタルプラクティスが、企業としての、かつ、集団的なプラクティスであることがよく分かる。

「スマートフォン省電力化への取り組みと成果—アプリケーション省電力化への誘い—」は、スマートフォン省電力化のシャープのプラクティス。それは、液晶デバイスの新規開発を含む企業としての総力戦である。同時に、ユーザの電池持ちに対する不満を解消するためには、アプリケーション開発者の協力が不可欠であり、そして何より、この取り組みを世界中のアプリケーション開発者に知ってもらうことが重要であるという視点が新しい。

次の2編は、モバイル上のサービスを中心としたプラクティスである。

「モバイルサービスにおける音楽サービス「LISMO」の変化と進化について」は、モバイル上の音楽サービスLISMOについてのKDDIのプラクティス。CDの売り上げは、2000年と比較すると6割も減少しているという。しかし、ライブコンサート市場の着実な成長に見られるように、音楽に対するニーズが衰退したわけではない。携帯時代からの取り組みを引き継ぎながら、激しい市場と技術の変化の中での音楽サービスの進化の模索が続けられている。

「Twitterの作るエコシステム構築におけるプラクティス」は、モバイル上の代表的なサービスの1つであるTwitterのプラクティス。Twitter上のデータ利用のエコシステムの変遷について、簡潔だが貴重な情報が含まれている。ここでの変化のトリガーになっているのは、企業買収と独占的な企業間連携だ。そうした市場のダイナミズムは、現代の企業のデジタルプラクティスを考える上で、示唆的である。

最後の2編は、モバイルにサービスを提供するインフラ構築にかかわるプラクティスである。

「モバイル業務向けプッシュ型サービス基盤の開発」は、富士通のプラクティス。最初に「ヒューマン・セントリック」という考え方についてのイントロがある。中

心的に論じられているのは、場所に応じて必要なアプリケーションのみをプッシュ型で提供するという動的デスクトップシステムの開発である。アプリケーションが特定のコンテキストが続く間だけしか利用できないという「ワンコンテキスト化」を行うことで、さまざまな粒度で利用シーンを考えることが可能となる。

「GREEにおけるインフラストラクチャのサービス化とその意義」は、GREEのモバイル向けサービス提供のインフラ構築のプラクティス。GREEは、1万台を超え

る規模のサーバを保有している。既存のオンプレミス環境上のサービスを、仮想化とオープンソースのクラウド技術Open Stackを利用して、サービスとしてのインフラストラクチャへと変化させていくという、興味深く重要な取り組み。さまざまなオプションの利点と問題点を明らかにしながら、GREEが行った選択を明らかにしている。また今後の方向性も明確に示されている。

最後に、忙しい中、貴重な時間をさいていただいた著者の皆様に、心から感謝したいと思う。